# 紹　介

榮新江・張志清主編

## 『從撒馬爾干到長安
—粟特人在中國的文化遺迹』

辻　正　博

近數年來のことであろうか、「ソグド人」の話題をこれまで以上に身近で見聞きするようになったと思う。たとえば、二〇〇二年十一月に滋賀・信樂のMIHO MUSEUM（以下「ミホ・ミュージアム」と記す）で「中國の中央アジア人——シルクロード東端の發見」と銘打った講演會とシンポジウムが開かれたが、主題となったのは「中國のソグド人」についてであった。[1] あるいは二〇〇三年の唐代史研究會夏期シンポジウムは「移動と交流」と題して開催されたが、五本あった報告のうち三本までがソグドの商人や武人を扱ったものであった。また同年に放映されたNHKスペシャル「文明の道」でも、ソグド人のことが「シルクロードの謎　隊商の民・ソグド」と題して大きく取り上げられ、後日、内容を増補して關連書籍も出版された。[2] 中國の學界における注目度はさらに高く、[3] ちょっとした「ソグド研究ブーム」が起こっているかに見える。こうした背景には、「謎」の解明が近年とみに進んできたという事情がある。

ここに紹介する『サマルカンドから長安へ——中國のソグド人が殘した文化遺迹』は、二〇〇四年四月に北京で開催された國際シンポジウム「粟特人在中國（歴史・考古・語言的新探索）國際研討會」に合わせて、中國國家圖書館善本特藏部で開かれた特別展觀の圖錄である。シンポジウム開催の經緯については、張志清氏の序言に詳しい。十六開本すなわちA四版ほどの大きさのハードカバーに、美しい裝幀がなされた立派な本である。一昔前の中國の出版事情を思うと、急速な經濟成長の恩惠がいよいよ文化・學術の方面にも波及してきたことを感じさせる。

圖錄とはいえ、本書は冒頭に七篇の論考を配しており、研究書としての性格も併せもっている。全體の内容は以下の通りである。

序言（張志清、中國國家圖書館善本特藏部）

一、粟特入華歴史的新探索

榮新江（北京大學中國古代史研究中心）「從撒馬爾干到長安——中古時期粟特人的遷徙與入居」

張慶捷（山西省考古研究所）「入鄉隨俗與難忘故土——入華粟特人石葬具概觀」

楊軍凱（西安市文物保護考古所）「入華粟特聚落首領墓葬的新發現——北周涼州薩保史君墓石槨圖像初釋」

齊東方（北京大學考古文博學院）「輸入・模仿・改造・創新——粟特器物與中國文化」

史睿（中國國家圖書館善本特藏部）「金石學與粟特研究」

雷聞（中國社會科學院歴史研究所）「割耳剺面與刺心剖腹——粟特對唐代社會風俗的影響」

畢波（北京大學中國古代史研究中心）「信仰空間的萬花筒——粟特人的東漸與宗教信仰的轉換」

二、圖示中國的粟特考古新發現

（一）史君墓

（二）安伽墓
（三）虞弘墓
（四）固原粟特人墓地
三、石刻碑誌上的粟特人
四、古籍文獻與敦煌文書裏的粟特人

**第一部**に「ソグド人の中國移住史に關する新探求」と題して並べられた七篇の論考はいずれも、北朝から隋唐時期の中國におけるソグド人について、多方面から分析を加えた興味深い內容のものである。

榮新江「サマルカンドから長安へ――中國中世におけるソグド人の移動と定住」は、この圖錄の總論とも言うべき論文である。時に他の民族を受け入れながらソグド人が各地に形成した聚落や部落の廣範なひろがりとその商業ネットワークとしての機能、中國王朝との關係などについて、實證に裏打ちされた的確な概說がなされている。かつて本誌第六三卷第一號で書評された『中古中國與外來文明』（生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇一年）所收の諸論文はその「考證篇」にあたる。

張慶捷「『鄉に入っては鄉に從え』と『忘れ難き故鄉』――中國に移住したソグド人の石製葬具概觀」は、虞弘墓・安伽墓・史君墓を主材料としてソグド人墓から發見された石製葬具について考察を加えた論考である。葬具の樣式とそこに描かれた圖像の分析等を通じて、祆教を信仰するソグド人が中國に定住した結果どのような葬送を行ったのか――ソグド的要素の殘存と漢文化受容のありさまが明らかにされる。本篇はまた、第二部所收の圖像を理解するための恰好の案內にもなっている。

楊軍凱「中國に移住したソグド人の聚落首領の墓葬に關する新發見――北周・涼州薩保、史君墓石槨の圖像初釋」は、二〇〇三年に發掘されたばかりの北周・史君墓について本格的に紹介した初めての論考である。歇山頂式とよばれる中國風の殿堂建築を模した石槨、壁面は精密な浮雕で埋め盡くされ、正面中央には漢文とソグド文で書かれた題刻が揭げられている。本論文ではレリーフの圖像分析に重點が置かれ、すでに知られているソグド關係の圖像との比較檢討がなされている。「粟特在中國」シンポジウムでもこの墓の話題が中心となった由であり、ソグド語銘文について報告をされた吉田豐氏による學會記がそのあたりの事情をよく傳えていて興味深い（『唐代史研究』第七號、二〇〇四年）。

齊東方「輸入・模倣・改造・創造――ソグドの器物と中國文化」は、ソグド商人により中國に齎された器物――西アジア・中央アジア風の意匠を施した壺や杯などを題材として、シルクロードを介した文化傳播の一齣を描いている。目新しいものをすかさず模倣、商品化するのは古今を問わず同じようである。

史睿「金石學とソグド研究」は、ソグド研究において石刻史料を利用する際の注意點として、拓本の品質の問題（善拓に據ること）、先行研究の問題（先人の著錄・題跋を參考にすること）、辨僞の問題（僞物に注意すること）の三點について、具體例を示して解說している。

雷聞「割耳剺面（耳を切り顏をそぐ）と刺心剖腹（心臟を刺し腹を割く）――ソグドが唐代の社會・風俗に與えた影響」は、自らの身體を傷つけて行う示威行爲として「割耳剺面」と「刺心剖腹」を取り上げ、唐代社會への影響を論ずる。かかる行爲は言うまでもなく儒敎の「孝」の德目に反し、國家はこれを嚴禁した。本論文は、文獻史

料に圖像から得られる情報を加味して、「割耳剺面」がソグド人の哀悼表現、あるいは請願の意志をアピールするための行爲であったこと、「刺心剖腹」が祆教の儀式中に見られる幻術に由來する可能性があることを指摘する。

畢波「信仰空間の萬華鏡――ソグド人の東漸と宗教信仰の轉換」は、ソグド人の信仰生活の多様性について、墓誌や出土資料に據りつつ考證を加えたものである。ソグド人の信仰した祆教はペルシャ本土のゾロアスター教そのままではなく多分に民間信仰の色彩を帶びていること、マニ教や景教への信仰も見られること、中國移住後に佛教、殊に禪宗に歸依したソグド人も存在したこと等、時に外來宗教を中國に傳える媒體となり、時に中國の宗教に歸依した彼らの多様な宗教信仰について詳細に語られている。

**第二部**「圖版で見る、中國のソグド人關連の考古新發見」では、近年陸續と發見されている中國のソグド人墓のうち、史君墓・安伽墓・虞弘墓・固原（寧夏回族自治區）ソグド人墓地の出土品について、カラー圖版をふんだんに使って發掘成果を紹介している。

これら四者のうち、固原のソグド人墓についてはつとに寧夏回族自治區固原博物館・羅豐『固原南郊隋唐墓地』（文物出版社、一九九六年）として報告書が出され、[4] 安伽墓についても最近『西安北周安伽墓』（陝西省考古研究所田野考古報告第二一號、陝西省考古研究所編著、文物出版社、二〇〇三年）と題して發掘報告書が刊行された。虞弘墓については未だ報告書の刊行を見ていないが、發掘に至る經緯から墓主・出土遺物などに關する考證までを紹介したＤＶＤビデオが發賣されている。鮮明な映像に加え、張慶捷氏や榮新江氏らが出演してコメントを加えており、興味深い内容に仕上がっている。[5]

さて、この第二部の見所は何と言っても「史君墓」から出土した遺物のカラー圖版であろう。出土遺物の本格的な寫眞紹介は本書が初めてであり、その學術史的價値は高い。第一部で言及されていた「漢語・ソグド語併記の墓誌」の全文を示す寫眞・拓本がないのは殘念と言うほかないが、[補註] 精緻を極めたレリーフの寫眞が數點紹介されているのは貴重である。なお、『藝術史研究』第五輯（中山大學出版社、二〇〇三年十二月）にも史君墓出土石槨浮雕に關する楊軍凱氏の論考と寫眞數點が掲載されており、參考に値する。

**第三部**「石刻碑誌上のソグド人」では、中國に移住してきたソグド人に關連する石刻史料を合計三十九點紹介している。その全てについて丁寧な解説が附され、末尾には圖版と錄文の典據が明示されている（第四部も同様）。紹介された石刻史料の八割ほど（三十一點）は墓誌であり、その約七割（二十二點）が洛陽出土のものである。餘談ながら、この比率がただちにソグド人の洛陽集中を意味するわけではない。現在公開されている唐・五代墓誌のデータベース（總數約七一五〇點）[6] をもとに試みに統計をとってみたところ、洛陽出土と思われるものはその半數ほど（！）であり、また、中國國家圖書館所藏の墓誌に限って洛陽からのものが多いわけでもなかった。ちなみに、唐・五代墓誌全體に占めるソグド人（いわゆる昭武九姓の者）墓誌の比率は約三％であった。

**第四部**「古籍文獻と敦煌文書中のソグド人」では、『朝野僉載』『安祿山事跡』（い

ずれも鈔本）、『酉陽雜俎』（黄丕烈手澤本）の典籍資料三點および中國國家圖書館所藏の敦煌文獻十四點の鮮明なカラー寫眞と、かつて王重民がパリで蒐集したペリオ文書のモノクロ寫眞四點とが、解説を附して紹介されている。このうち注目すべきはやはり、彩色圖版で示された北京本の數々であろう。衆知の如く、歐亞に點在する敦煌文獻の公刊事業が目下、中國の出版社により順次進行中である。これにより研究環境は以前に比べて格段に向上したと言えるが、圖版の大半は白黒であり、見づらいものも間々ある。中國國家圖書館所藏の敦煌文獻について言えば、現在、新編號を附して江蘇古籍出版社より圖錄が刊行されつつあるが、圖版の品質は他書と大差なく、原文書の様子をつぶさに知ることは必ずしも容易でない。北京本のカラー圖版は、たとえば高田時雄編『草創期の敦煌學』（知泉書館、二〇〇二年）の中で郝春文氏が未公刊の俗文書を五點紹介しているが、これなどは稀有な例であろう。その意味で、ソグド人關連史料に限られているとは言え、今回このような形で彩色圖版が掲載された意義は大きいと思う。ペリオ文書の寫眞については、意外にも外情報量が多く驚かされた。何よりも先學により蒐集された研究資料がこのような形で公けになるのは、喜ばしいことである。

粗略ながら本書の紹介を終えるにあたり、史料・遺物の評價、ひいては研究の進展にも「機縁」があることを感じないわけにはいかない。一九二〇年代に河北・安陽で發見された北齊時代の石棺床は、早い時期に海外に流出して歐米の美術館に分藏されたせいか、おもに中國國外で先驅的な業績がいくつか現れたものの、結果として中國の學界に與えた影響は大きくなかった。文革中の一九七一年に發見された關連遺跡は、その重要性が十分に認知されなかったためにダム建設の犠牲となり水没の憂き目にあったという。[7] そして最初の發見から數十年を經て華北で見つかった北朝末の石棺床も海外に流出、日本のミホ・ミュージアムの所有に歸した。一九九七年の開館時から展示されているこの「棺床屏風」も、はじめは實例のほとんど存在しない「まれな作品」という位置づけであった。[8] ただ、この石棺床が學界に與えたインパクトはさまざまな意味で大きかった。一九九九年に太原で虞弘墓が、翌二〇〇〇年に西安で安伽墓が相次いで發見され、發掘成果が異例のスピードで二〇〇一年一月の『文物』誌上に掲載された背景には、學界の極めて熱い關心があったものと思われる。

ピースがまとまり出すと、パズルは加速度的に組み上がってゆくものである。本書で紹介された史君墓に續き、二〇〇四年四月には新たなソグド人墓が陝西・西安北郊で發見され、その速報が『中國文物報』（二〇〇四年十一月二十四日）に掲載された。畫像を伴った石棺床の上には安置された墓主の亡骸がミイラとなって殘っており、墓誌も見つかった。墓主の姓名は康業、康居國王の末裔といい、北周の天和六年（五七一）に死去している。いずれ正式の發掘報告が出されるとして、これによって中國内外のソグド研究は一層加熱するに違いない。

**註**

（1）『ミホ・ミュージアム研究紀要』第四號（二〇〇四年）に講演會・シンポジウムの詳細が掲載されている。

（2）ＮＨＫ「文明の道」プロジェク

ト・本村凌二・蔀勇造・吉田豐ほか『NHKスペシャル　文明の道　3　海と陸のシルクロード』（日本放送出版協會、二〇〇三年）

（3）榮新江「Miho美術館粟特石棺屏風的圖像及其組合」（『藝術史研究』第四輯、二〇〇二年）一九九～二〇一頁を參照。

（4）その後出版された關連する報告書として、以下のものがある。

原州聯合考古隊編『唐 史道洛墓 原州聯合考古隊發掘調査報告1』（勉誠出版、一九九九年）

寧夏回族自治區固原博物館・中日原州聯合考古隊編『原州古墓集成』（文物出版社、一九九九年）

また、最近出版された『固原歷史文物』（寧夏固原博物館編著、科學出版社、二〇〇四年八月）でも、彩色圖版が數點掲載されている。

（5）「發現虞弘墓」（『探索・發現　考古中國Ⅰ』所收、中國國際電視總公司。四十五分×三篇）。

（6）氣賀澤保規編『新版　唐代墓誌所在總合目錄』（明治大學東洋史資料叢刊三、二〇〇四年、明治大學東洋史研究室）、および中國石刻文物研究會編「唐・五代十國時期墓誌・墓碑データベース」（http://sekkokuken.mind.meiji.ac.jp/）。

（7）註（1）『研究紀要』八〇頁、八二頁。山東省益都縣博物館・夏名采「益都北齊石室墓線刻畫像」（『文物』一九八五―一〇）。一九八二年にも甘肅・天水で畫像つきの石棺床が發見されたが、發掘報告が出たのは十年後であり、取り上げ方も虞弘墓・安伽墓に比べれば隨分と地味であった。天水市博物館「天水市發現隋唐屏風石棺床墓」（『考古』一九九二―一）。兩者とも、近年その史料的價値が再評價されている。

（8）ミホ・ミュージアム編『ミホ・ミュージアム南館圖錄』（ミホ・ミュージアム、一九九七年）、二四七～二五七頁。

〔補註〕小文脫稿後、『文物』二〇〇五―三に史君墓の發掘簡報が掲載され、墓誌全體の拓本と釋文が發表された。西安市文物保護考古所「西安北周涼州薩保史君墓發掘簡報」。二〇〇四年四月　北京　北京圖書館出版社　十六開本　四＋八＋一九一頁　一八〇元